ハラー対ポープ ――『理性、迷信、不信仰についての考え』(1732年)と『人間論』(1733年－34年)の比較

HALLER CONTRA POPE ―― ›Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben‹ (1732) vis-à-vis ›An Essay on Man‹ (1733－34)

高 橋 克 己
TAKAHASHI, Katsumi

(国際コミュニケーションコース)

※本稿は日本独文学会・平成元年度秋季研究発表会(大阪大学・1989年10月14日)における口頭発表を骨子としている。

(1)「思索欲」

ハラー(1708年－1777年)はポープ(1688年－1744年)より二十歳ほど年少である。従って前者が匿名で処女詩集『スイス詩歌の試み』初版を1732年に公刊し、その中に1729年執筆の『アルペン山脈』と『理性、迷信、不信仰についての考え』を含め、更に数篇の作品を掲載した時、後者は既に知名度の高い文人であった。その『批評論』(1711年)や『ウィンザーの森』(1713年)など実作のみならず、ポープは『イーリアス』の翻訳(1715年－1720年)によっても好評を得ていた。すなわち『人間論』(1733年－1734年)を45歳の頃世に問うポープは、自国のイギリス人のみならず、遠く離れた山岳の国スイスの青年ハラーにさえ知られた国際的な詩人であった。

実際ハラーは1727年夏イギリスに留学して、この国を見聞している。そして帰国後1728年にバーゼルで13歳ほど年長の「わが友シュテーリン博士」をはじめ、懇意な人々と談論しているうちに、この知人たちが「英国人たちをもちあげ、私に度々、ドイツ語圏の詩歌芸術の無力(Unvermögen der deutschen Dichtkunst)を責めた。そこで私は挑戦を受けた」と、『理性、迷信、不信仰についての考え』(以下『理性考』と略記)の前書きにハラー自身記している。当然ポープも話題の「英国人たち」に含まれている。ここで無力とは具体化すれば、「哲学詩人の欠如」(Mangel Philosophischer Dichter)のことで、この汚名を濯がんものと若き20歳そこらのスイス青年が奮い立ち、敢然と『理性考』の筆を執ったのである。成程ハラー自身『アルペン山脈』第300句で述べる通り、スイス連邦は「小国」に過ぎない。しかし諸国に先駆け既に14世紀初頭スイスは共

和国となっており、その『スイス詩歌の試み』には周辺の強大な王国に圧倒されぬ気概が感じられる。

問題を『人間論』と『理性考』の原典で見てみると、ハラーは当詩歌の第17句への脚註（1734年『スイス詩歌の試み』再版以降）において、「著者がポープと共有する考えの一つ」に言及している。つまり第17句に言う「天使と獣との中間存在（Mittel-Ding)」としての人間把握が問題であり、「この考えは但し、当スイス人により当イギリス人よりも数年早く使われた」と、脚註に銘記されている。この時ハラーは『理性考』の表題の下に「1729年」と執筆時期を記し、この年を『人間論』刊行の1733年（第一書簡から第三書簡まで）と1734年（第四書簡）と比べている。そして同じ表現をハラーは『スイス詩歌の試み』再版で加えた作品『悪の根源について』第二書の第103句でも、「天使と獣との中間存在（Mittelding)」（決定版1777年では第107句）と使っている。この時1734年にハラーはまだ26歳そこらである。きっと著名なポープに比肩できたことで若者は満足だったに違いない。

それ程ハラーには先輩ポープが大きな存在と考えられた。しかも若きスイス人は中年のイギリス人に、自らの模範となる点を認めていた。このことは『スイス詩歌の試み』第四版（1748年）の序文が良く物語る。ここでハラーは「英国詩人たちから思索欲（Liebe zum Denken)、および重厚な詩作の優先とを受け入れ」た旨を語り、「その偉容に私が驚嘆したこの哲学詩人たちは、軽い泡のごとき暗喩の上を泳ぐ（バロック詩人）ローエンシュタインの膨らみ浮腫んだ本質を私から押しのけた。」と告白している。自らも真剣に詩作に勤しむ者として、ハラーがイギリスの先輩ポープ達に見い出した美点は、文飾でなく思索であった。興味深いことにポープ自身も既に1706年、まだ18歳の頃に同じことをウォルシュ宛書簡で表明している。「人々はいわゆる機智（wit）を、あらゆる問題につき至る所で求めています。そして人々は、自然本性（nature）が真実（truth）を愛でるのと同じく、美辞麗句（flourishing）をほとんど許容しないことを考量しません[1]」とあり、敢えて哲学詩人と言われるに恥じない姿勢をポープ自身も示している。

さて思索の内容として再び先の「中間存在」に戻ると、ポープの『人間論』の場合、その第二書簡の冒頭において「人間」（第３句）が、その第３句で「中間状態」（middle state)、さらに第７句で「中間」（between）において把えられている。そして『理性考』第17句の「天使と獣」については、『人間論』第一書簡の第238句以下が、「天使、人間、獣、鳥、魚、虫螻」と列挙しつつ言及している。この後者の箇所は、形而上の問題に関心の深い哲学者カントが、その前後を『天界の一般自然史と理論』（1755年）第三部「補遺」で引用し、「存在の階梯の言わば最中段を占める人間本性」を論じている。この例からも『人間論』の詩句が、哲学者や詩人において思索欲を促す心の糧となった点が確認できよう。[2]

(2)観念の明晰さ

今まではハラーやカント達と協和するポープの側面に関心を払った。だが『純粋理性批判』（1781年）のような重厚な思索は、あくまでドイツ語圏に固有であって、必ずしも英語圏にはあてはまらないと考えられる。つまりカントやハラーのポープと、本場イギリスのポープは同じでな

い。ましてフランス語圏におけるポープとなれば、一層ドイツ語圏のポープと異なるであろう。例えば先程話題とした『人間論』第一書簡の第238句前後は、ポープの原詩を、カントの引用したドイツ語訳と比べてみると、相当に異なる印象を受ける。まず英語は第237句から第241句まで、とても弾みの良い語勢で続く。

Vast chain of being ! which from God began,
Natures aethereal, human, angel, man,
Beast, bird, fish, insect, what no eye can see,
No glass can reach ; from infinite to thee,
From thee to nothing. ...

「存在の巨大な鎖！　それは神に始まったもので、天上と人間（じんかん）の被造物ら、天使、人間、獣（けだもの）、鳥、魚、虫螻、目に見えぬもの、望遠鏡の届かぬもの、無限から汝へ、汝から無へと至る。」とあり、定冠詞の無い言わば漢詩のような引き締まった文体である。

丁度私達が返り点や送り仮名をつけて漢文を読むように、ドイツ語訳は定冠詞で単数名詞を規定し、複数は無冠詞に留めて限定をせず、筋道の解かり易い表現となっている。

Welch eine Kette, die von Gott den Anfang nimmt, was für Naturen
Von himmlischen und irdischen, von Engeln, Menschen bis zum Vieh,
Vom Seraphim bis zum Gewürm ! O Weite, die das Auge nie
Erreichen und betrachten kann,
Von dem Unendlichen zu dir, von dir zum Nichts !

単数でも「神」が無冠詞なのは、規定されない「あの無限なる者」だからであり、「おお、広大さ（つまり広大な鎖）よ！」が無冠詞なのは、呼びかけられているからである。また原詩の「存在」(being) は敢えて訳せば「存在者」(現在分詞を名詞化した形) とでき、更に厳密に複数で「諸存在者の鎖」(Kette der Seienden) と意訳できよう。なぜなら『神学大全』(1265年－1274年) 第一部（第4問の第2項）でトマスが「存在そのもの」(esse ipsum) と定義した「神」は、あくまで純粋な存在 (Sein) に他ならず、被造物にあたる存在者 (being) と峻別されるべきであるから。[3)]

ポープの場合は、「神」(Gott) と、その「被造物たる自然の諸物」(Naturen) との区別が不明確で、この被造物 (Natures) にあたる「諸存在者」の中に「神」(God) も入ってしまう風にも取れる。他方ドイツ語訳は被造物の巨大な鎖が「神から始源を得ている」(von Gott den Anfang nimmt) と解し、『創世記』冒頭(1の1)の「始源 (Anfang) で神は天地を創造した[4)]」とある記述の「始源」を被造物の側へと算入している。この点ポープの表現では、「始源」と「神」の差異が明示されていない。また原詩にはないが、ドイツ語訳は被造物の筆頭を「熾天使

たち」(Seraphim) と明示している。つまり人間の上に位する「天使たち」(Engel) は、トマス達が使徒パウロの弟子として重んじたディオニューシオスの著『天界位階論』(第6章の2) 以来、熾天使 (Χερουβίμ) を第一に、第二は智天使 (Σεραφίμ)、第三は座天使、第四は主天使、第五は力天使、第六は能天使、第七は権天使、第八は大天使、第九は単なる天使となる。[5] この序列を訳者は明示している。更にポープが平たく「見る」(see) としている動詞を、ドイツ語訳は「考察する」(betrachten) とし、いかにも思索に相応しい言葉つきに変えている。

勿論ポープの『人間論』は哲学書でない。それは教訓詩である。従って、観念の明晰さとか的確さを求めることは、必ずしも重要でないとも思われる。しかし読者が『純粋理性批判』の著者となれば、この要求を無下に斥けるわけにもゆくまい。この点1740年にドイツ語へと翻訳したブロッケスは、学識ある詩人として十分カントにも満足を与える仕事を為したと言える。そして『理性考』を公刊する詩人ハラーも若いながら、詩集『地上の楽しみ』(初版1721年) で名高い先輩ブロッケスに劣らず、諸概念の用法には気を配っていると考えられる。その例を『理性考』第313句以下に見てみよう。「いかにして神が (果しなき) 永遠 (の時間や空間) を、始めて孤独の中で考え出したのか？ なぜ或る地点で、その前でなく、神が (この) 一つの世界 (eine Welt) を創ったのか？ 私達の精神 (Geist) は、一定の肉体 (ein Leib) をまとう以前、何であったか？ そして (死の時に心身の) 何もかも (alles) が精神から去るなら、いかにして精神は存続できるのか？ いかにして始めて或る永遠の空無 (ein ewig Nichts) が、私達のうちにおいて、或るもの (Etwas) となったのか？」

不定冠詞は適切な所に附されている。ポープのように弾み良く単語を連ねるというよりむしろハラーは慎重に言葉を選びながら思いを索らし考え続ける。ここで魂 (Seele) とせず、精神と言うのは、ハラーが神の聖なる霊 (Geist) の似姿として人間精神を摑み、これを魂よりも根源に据えているからである。以上の考察からも、ドイツ語圏の詩人ハラーが、英語圏の詩人ポープから前述の「思索欲」を受け取ったという場合、決して自分に無いものを恵まれたのではなく、むしろポープの成果に触れたのを幸運な機因として、ハラー自身の心に常よりも強い思索欲が沸き上がって来たと言うべきであろう。それは只今見たドイツ語訳ポープが、原詩のポープとは異なる姿を取っているのに似ている。成程ポープ自身にも文飾を慎み、詩語を鮮明な観念へと彫琢せんとする意欲はある。だが英国詩人にはカント達とは別の的確さがあるようである。

(3)箴言と省察

重厚な思索を本務となすカント達ドイツ語圏の学者の対極に、軽妙洒脱な機智 (espritやwit) に富んだ啓蒙家ヴォルテール達フランス語圏の教養人がいる。この啓蒙家は、ハラーがイギリスを訪れる1727年の前年から1729年にかけて、この思想・政治上寛容な国に亡命し、この見聞をまず英訳して『英国に関する書簡』と題し1733年に匿名で刊行し、この原典フランス語版を翌1734年に匿名で世に出す。これが『哲学書簡』であり、その後版を重ねてゆく。詩人ポープに言及する第22書簡は1756年版で大巾に加筆されるが、それ以前の版においては主に詩句の律動や音楽性が重視されている。つまりカント達では余り気のつかぬ原典の口調の良さが、きっと時流の啓蒙

家を喜ばせたに違いない。[6)]

その眼目は次の文章に表わされている。「詩は一種の音楽（musique）であり、それを評価するためには聞き耳を立てねばならぬ」として、ヴォルテールはポープを「英国が有した最も優雅（élégant）で、最も的確（correct）で、一層と大したことには、最も調和ある快音（harmonieux）の詩人」と呼び、「ポープはイギリスの金管嗽叭（trompette）の鋭い音響を、木管横笛（flûte）の甘い音色に変えてしまった」とまで評している。丁度ハラー達とは正反対のポープ像がここにあり、かつて機智や美辞麗句を厭い、むしろ飾らぬ自然本性に適った真実をこそ求めた若きポープの面影はここにない。確かに当時ロココ風の洗練（galanterie）が尊ばれ、ポープもこうした時代の趣味に無縁ではない。この点カント達のポープ像は一歩一歩思索するに似た勤勉な市民の意識に通じ、旧体制後の新たな時代と協和する。とは言うものの、先程引用した「存在の巨大な鎖」に関する詩句を英語で音読しただけでも、ここに洗練された優雅な木管横笛の甘い音色（song doux）を聞き取ることは困難であろう。

それ故、優雅な横笛との評価は誇張として片付け、同じくポープ評にある的確という点をむしろ考えてみよう。ひき続き第22書簡には、「ポープが極めて明快（clair）である」とも記されている。[6)] ここで言う明快とは、概念の明晰でなく、解かり易いとの意であろう。そして『人間論』の詩句は、的確に読者の解かり易さに訴えかけると取れる。その具体例を第一書簡の第265句以下に見てみよう。

265　まさしく馬鹿げておろう、定められた仕事や苦労を嘆くことは。
　　それは万物を導く偉大なる精神（Mind）が定めていることゆえ。
　　何であれ一切は、一つの巨大な全体の諸部分に過ぎず、
　　その体（body）は自然であり、そして神がその魂（soul）なのだ。

成程いつとはなしに読者は何かしら解かった気になる。それほど箴言風のまとまり良い詩句は、印象深く心に刻みこまれ、それについて熟慮する暇を与えない程である。今日でも思想史家は、この特性に着目して、こう解説する。「たびたび繰り返される絞切り型の諸命題（formules）は、完璧な明瞭さ(netteté absolue)を備え、一連の詩行、また唯一句の中に、諸々の格言(axiomes)を包含し、これを他に望み得ない力強さと調和をもって表現している。恐らく世界にある教訓詩で、これほど容易に記憶の中へと刻みこまれるものはなかろう。[7)]」

素直に「諸々の格言」が「記憶の中へと刻みこまれる」ような読者には、「絞切り型の諸命題」に的確で完璧な明瞭さが期待できる。多分ヴォルテールも『哲学書簡』で、このような読者を念頭に置いているのであろう。そこで堂々と啓蒙家は例の「存在の巨大な鎖」につき1756年の加筆部分で、「プラトーンが詩人として語ったのは、その解りにくい散文（sa prose peu intelligible）においてであり、そしてポープが哲学者（philosophe）として語っているのは、その驚嘆すべき詩句（ses admirables vers）においてである[8)]」と述べ、解り易いという点でポープを称え、強靱な思索力の持ち主プラトーンを敬遠している。なぜ『人間論』が解り易いかと言うと、その絞

切り型の箴言句集には、思考上の難局（ἀπορία）が回避されているからである。他方プラトーンが歴代の哲学者の筆頭に古来位置づけられてきたのは、正にアポリアーへの見事な問いかけを多岐にわたり繰り広げたからである。

既成の出来合いの哲学は教えず、哲学上の難問をこそ考え抜くと、カントが主張していたことは有名である。この点ハラーの『理性考』はポープの『人間論』と異なり、箴言が出来合いの知識として道徳意識の中へと蓄積される所へ向かわず、むしろ既成の片言隻句を敢えて疑いつつ新たな問いかけを芽生えさせる。その省察にうねる思念の脈動を、『理性考』の第93句以下に確かめてみよう。

私達は存在し、誰もが十分にこのことを意識し、
否み得ぬ感情が、私達の胸の中で証人となる。
95　だが、いずこに私達は由来し、何に私達は成るべきなのか？
このことを私達の創造主は、賢者にのみ示そうと望んだ。
ここに張り渡されているのは、おお死すべき人間たちよ、霊魂の腱力であり、
ここでは知ることが永遠に役立つとともに、迷うことが損害を与え得るのだ！

『人間論』のような明快に割り切る断言は表立たない。万事は無限の過去と久遠の未来とに懸かる心の弦に共鳴して問われている。ここに漲るのは見えざる「霊魂の腱力」（der Seele Sehnen）であり、これに支えられ敢えてドイツならではの思想詩（Gedankenlyrik）と言える新たな創作の萌芽がハラーに認められるのである。

(4)啓蒙期の理性

『人間論』や『哲学書簡』が世に受けた啓蒙期は、理性の時代とも言われる。但し、理性と言っても、ラテン語系のフランス語の筋の理性（raisonやreason）と、ゲルマン語系のドイツ語の理性（Vernunft）とは同一視できない。つまり前者に固有な合理性は、後者に必ずしも期待できない。例えば既に引用した『理性考』第313句でハラーは、「いかにして神が（果てしなき）永遠（の時間や空間）を、始めて孤独の中で考え出したのか？」と、更に第317句で、「いかにして始めて或る永遠の空無が、私達のうちにおいて、或るものとなったのか？」と、問いを重ねる。ここでドイツ語圏の理性は、17世紀の思想家パスカルが『省察』206で直面している状況に身を置いている。「この無限なる諸空間の永遠の沈黙（silence éternel）が私に恐怖をひきおこす」と告白し、続いて『省察』233で著者は「無限―空無」（Infini－rien）を主題とする。[9]

当然パスカルの要請は、「だから躊躇せずに、神が存在すると断言せよ」となるけれども、これは合理性から帰結しない。なぜなら「神は存在するかしないか」の二者択一に際して、『省察』233では「ここで理性（raison）が何一つ決められない」からである。そして永遠の空無として「無限の混沌があり、これが私達を隔てる」ことになる。[9]『理性論』でハラーが語る永遠（Ewigkeit）も、こうした切羽詰まった極限状況を背景としている。

いかにして、そもそも思惟がまず始まり、異質な諸存在が（いかにして）
魂の用具となっているのか？ 始源なき持続なす広大な諸圏が、
320　いかにして（自由な）旅を阻まれるのか？
そして（いかにして）永遠に時間が生成し、いかにして時の浅瀬が、
永遠の海原（Meer der Ewigkeit）でいつか消えねばならぬのか？

先に引用の第317句までにつながり、『理性論』の第318句以下は第322句までこう続く。

いわゆる実存の側からのこうした問いや不安に対し、時流の啓蒙家は『哲学書簡』25で明答を用意する。この第25書簡の副題は、「パスカル氏の『省察』について」とあり、軽妙洒脱の機智で著者は、深刻な実存の淵に蓋をしようと努める。その『省察』233に関する論述には例えば、「こうパスカル氏に言えよう。私の理性（ma raison）を納得させることから始めていただきたい。私の為には勿論、何か神がいる方が得である」と記されている。[10] 確かに、『三人の偽善家』（1719年）の著者に宛てた書簡詩（1769年）で後にヴォルテール自身、「もし神が存在せぬなら、それを考案せねばなるまい」（第22句）という名文句を残しているほどである。[11] 従って、少なくとも『哲学書簡』の著者の理性には、「ここで理性が何一つ決められない」ほどの難局（アポリアー）は、不合理の一言で片付けられたに違いない。ところが屈託なきこの様な「ヴォルテールに、一種の畏怖（frayeur respectueuse）を喚起した」と言われるのが、他ならぬ『理性考』の作者ハラーなのである。[12]

ここで本題の『理性考』と『人間論』の対比へと移ろう。どちらかと言うと、後者の理性（reason）はヴォルテールのに近く、前者の理性（Vernunft）はパスカルのに近い。それは語源から見ても、ヘーゲルが『歴史哲学講義』（1837年）の序論で指摘する通り、「理性（Vernunft）が、神の業への静聴（Vernehmen）だから」である。[13] 従って先に見た『理性考』の問いかけ（第313句－第322句）は、この静聴する理性の成果と看做される。他方ポープの英詩に宿る理性（reason）に、この趣はない。それは聴覚の理性というより、むしろ視覚の理性である。例えば『人間論』第二書簡の第107句以下では、「人生の大海原に」おいて「理性が羅針盤」（Reason the card）であると述べられており、それは聞きつつ問うのではなく、むしろ遙か先をも見通さんとするものと考えられる。

「理性が羅針盤」（第108句）として万事を導く『人間論』では、続いて第二書簡（第115句－第122句）において、印象深い格言が詩歌の衣をまとって繰り広げられる。

115　充分なのだ、理性が自然の道を守り、
欲情を服従させて調合し、自然と神に従うとすれば。
慈愛と希望と歓喜、これら一連の晴れやかなものは、美しき快楽の仲間。
憎悪と恐怖と悲哀、これらは苦痛の一族。
これらを巧みに混ぜあわせ、然るべき限度内に閉じこめ、

120　精神に平衡を与え、これを維持する。
　　さまざまな光と影、これらを程好く和合して競争させれば、
　　ただ活気と彩りをこそ我らの人生は獲る。

「まずは従え、自然に」(First follow Nature) と、既にポープは『批評論』の第68句で忠告している。そして続く第88句以下で「諸規則」(Rules) を詩人は「理路整然とした自然」(Nature methodiz'd) と呼び、これを求める。同じく『人間論』でも「自然」は合理性に適う地平において重視され、これと調和する「理性」が表立って話題とされている。この背景には万有引力など当時の学会で注目を浴びた科学の理論があり、この成果は『人間論』第二書簡の第32句なら「自然の法則」(nature's law) と名づけられる。

同じくハラーもポープの同時代人として、自然に関し古典物理学が数式化した業績を、「神の手になり、決して壊れぬ、永遠の諸法則 (Gesetze)」と、『理性考』の第55句以下で承認している。しかしながら『理性考』の筆致は、自然科学の合理性に適う明快なポープの文体と異なり、言わば理性の限界を意識しつつ、むしろ雄弁ならざる訥弁を基調した控え目なものである。

　　理性 (Vernunft) は月影のごとく、闇の時代の慰めとして、
360　鳶色の夜を貫いて、薄明の下に私達を導くことができる。
　　真理の曙光は始めて真実の世界を示す、
　　日輪さながらの神の光が、私達の黄昏を貫き下る時に。
　　(その時) 啓示された教えの響きに対し、余りに口ごもり勝ちにしても、
　　理性はこの世で神を、自ら固有の訥弁 (Lallen) で称える義務があるのだ。

「余りに口ごもり勝ち」(Zu stemmelnd) とあるハラーの理性に固有の訥弁は、カント以降ドイツ哲学に定着し、思想家達は『純粋理性批判』より後、もはやヴォルフ流の合理的考え (Vernünfftige Gedancken) を取らなくなる。その1819年以来の『合理的考え』もポープの『人間論』同様、まず訥弁には繋らぬ「自然の法則」(Gesetze der Natur) を旨としていたのであった。[14]

(5)「良く理解された無神論」

『理性、迷信、不信仰についての考え』において、理性の対極にあるのは、不信仰よりむしろ迷信である。この点は『人間論』も同じで、不信仰にあたる無宗教とか無神論は、『理性考』ともども正面切って扱われない。その理由は『人間論』の場合、前述の第二書簡 (第115句以下) にある通り、理性が自然と神に従うのを基調としているからである。ここで自然とは人間本性にとり良心を意味し、その導き手が『新約聖書』の神の子イエスであることは暗黙の了解である。当時ポープ達ヴォルテールをも含めた啓蒙18世紀の理神論者 (Deist)[15] には、後の1770年に匿名で出た『自然の体系』(2の10) が説くこと、すなわち「良く理解された無神論 (athéisme) が自然 (nature) と理性 (raison) に基礎づけられる[16]」ことなど論外であった。だが正に自

然と理性を『倫理学』(1677年)の礎とした「前世紀の偉大で高貴な人物スピノーザ」こそ、神を否認する者(Gottesläugner)と当時は看做されていた。「スピノーザは無神論者(athée)であったのみならず、無神論(athéisme)を教えもした」と、ヴォルテールも『哲学辞典』(1764年)で公言している。[17]

「理性で正確に吟味すれば、但し心情(Herz)を去った冷徹な理性で即ち万事を説明しようとするなら、スピノーザの諸理念(Ideen)に到達する必然を私は認めました」と、1791年ヘルダーリンも語っているように、まず『倫理学』ほど透徹した純粋理性の成果は他に望み得なかったようである。[17] この純粋理性に限界を設ける批判哲学をカントが提唱する前、時流の啓蒙家たちはスピノーザを無神論者に仕立てて安心していたと言える。つまりヴォルテールには、ヘルダーリンのようにスピノーザかカントか？　で悩む局面が無く、その『倫理学』も前述のプラトーンの場合と同じく「解りにくい散文」と評して片付ければ済んだようである。同じ理神論者でも詩人ポープは、それほど軽妙洒脱でない。その『人間論』の第四書簡(第141句以下)では、「一部に衝撃を与えるものが、その他を啓発せんとし、それら全てが恩恵を受けることのできる体系など一つもない(Nor with one system . . .)」と断言され、おおよそ万事を説明する力は理性に拒絶される。これは哲学に対する破産宣言である。

少なくとも古来プラトーンよりこのかた、哲学者は首尾一貫した体系を理性に期待し、ポープのような相対主義を取らなかった。そこで『理性考』のハラーは、その第311句以下において、むしろ思考(denken)に限界(Schranken)を認め、「この限界内に立ち尽くそう」とする。このように理性の限界内で思索を繰り広げるのが、やがて登場するカント哲学である。また同時に『理性考』は先に触れたように、実存の不安を洞察する鋭い知性パスカルに通ずる面を持ち、極限状況において理性が「盲目の裁き手」(Richterin)となり得る点をも第254句以下で留意し、唯物論風の無神論者に第255句以下で問いを投げかける。

ここでは魂そのものが測られ考慮され
240　魂は時計仕掛けに違いなく、…
この時、肉体と不可分の魂は、…
自身を動かすゆえ思考し、そして死ねば消滅する。
…

これらの命題を信ずる者は、誰にも隷属せず、
250　理性のみを、自らの裁き手と認める。
賢明なのだ、もし真理が確実な印に認められ、
先入見が、至って鋭い眼光をも眩ませず、
そして必然と偶然との乱戦の中で、
理性が、選択と懐疑の裁き手であるなら／
255　おお盲目の裁き手よ／　汝の命令が誰を満足させると言うのか？

汝はしばしば自らを欺き、幾度か欺かれるのであるから。

このように『理性考』は問う。他方『人間論』におけるポープは、「体系など一つもない」(Nor with one system …) と、箴言風文体で言い切る。

必然的な自然の体系を『人間論』は頭から否定し去る。これに対しハラーは自然の必然を言わば純粋理性で容認しつつも、選択 (Wahl) と言った実践理性の領域が「必然と偶然との乱戦」にあることを示し、ここに純粋理性が必然のみ見出そうとしても無駄である旨を申し立てる。他方ポープは「体系など一つもない」(第142句) と宣言した後まもなくして、第四書簡の第145句において、「何でも現存するものは全て正当である」(Whatever is, is right.) と言う『人間論』の主張を提示する。ここで問題なのは、神のような純粋な存在 (Sein) でなく、この世の存在者 (being) に他ならず、詩人は同じ現存肯定の文言を第四書簡の末尾 (第394句) でも繰り返す。また同じ文言は第一書簡の結句にもあり、関連する理由づけが先行している (第289句以下)。

全て自然は、汝に未知の抜芸 (art) に他ならず、
290　全て偶然 (chance) は、汝の目に入り得ぬ道しるべ (direction) であり、
全て不一致は、理解されぬ調和であるし、
全て部分の悪は、普遍の大局において善。
そして高慢にもかかわらず、迷う理性判断 (erring reason) にもかかわらず、
一つの真理は明白、「何でも現存するものは全て正当である」(Whatever is, is right.)

無神論者と言われたスピノーザによる自然の必然の体系と、ここで第289句から第292句にかけて主張されている内容とは矛盾しないと考えられる。但し「迷う理性判断」と、それに続く断言とは二律背反に他ならない。そして現存全体の正当化は、もし現存の根拠を神から自然へと移せば、直ちに「良く理解された無神論」ないしは唯物論の立場を保証せざるを得なくなるであろう。

(6)「迷信」

「カントの『純粋理性批判』／この書物はドイツで、理神論者たち (déistes) の神 (Dieu) を殺した (裁きの) 剣である」と、『ドイツ論』(1834年) でハイネは述べ、この哲学者を「思想界の (伝統の) 偉大なる破壊者」と評している。ここで理神論者とは、そもそも超越した存在そのもの (カントの用語では物自体) として唯一神を考えるキリスト教徒を指すが、当然ポープやヴォルテール達も念頭に置かれている。[18] すなわち知性の限界を踏み越える人知の越権行為がカント批判哲学により厳しく断罪され、先程の『人間論』(第一書簡末尾) で表明されるような迷う理性判断を度外視した断言が、言わば迷信の産物と看做される。この点ハラーの『理性考』における慎重な言葉使いは、十分カントをも満足させたと思われる。さもなくば批判哲学者が『天界の一般自然史と理論』(1755年) 第二部の第7章において、このスイス人を「ドイツ語圏の

詩人の中で最も崇高（der erhabenste)」と称えることは無かったであろう。[19]

確かに、崇高とは適切で、前述のごとくハラーが、「ヴォルテールに一種の畏怖を喚起した」とされる点を取り上げてみても肯ける。さて逆に時流の啓蒙家の方は、只今のカントの著作の出た翌年1756年に大巾に加筆した『哲学書簡』22において、「ポープの『人間論』が … 私には、どこの言葉にせよ今まで書かれた教訓詩で、最も美しく、最も為になり、最も崇高（le plus sublime）と思われる」と、いささか大袈裟な賛辞を呈している。同じ文言で最も崇高とあっても、カントが形而上学の威厳を念頭に置いているのに対し、ヴォルテールの方は最も為になる（le plus utile）という点が重要のようである。[20] そこで為になる点は何か？　と言えば、まず第一に留意されるのは、『人間論』でポープが理神論を説いている点である。この理神論の対極に置く迷信（Superstition）について『哲学辞典』でヴォルテールは、「何らかの至高存在（un Être suprême）への崇敬、およびその永遠の諸秩序（ses ordres éternels）に心から服従することを守らぬものは、ほとんど全て迷信である」と定義している。[21] カントによれば、これは理論理性でなく実践理性に関することであるけれども、ポープたち理神論者は敢えて理論上でも至高存在とその諸秩序を公認しようとする。

ポープの用語で至高存在は、「唯一かつ第一の偉大な父」（One great first Father）と、『人間論』の第三書簡（第226句）に記され、「そして単純な理性（reason）は唯一者をのみ求めた」（第230句）とあり、これが「造物主」（第232句）たる「唯一の神」（第234句）に他ならない。カントが物自体と言い、ヴォルテールが至高存在と呼んだものを、ポープは如実に『聖書』の用語をそのまま使って表現している。成程すでに引用した『人間論』の第一書簡（第266句）で、神は「万物を導く偉大なる精神」とあった。だが『人間論』は躊躇せず、この一般化した精神を特殊な既成の神観に結びつけている。ちなみに詩人の名前ポープは、英語で旧教カトリックの総本山ローマの法王（Pope（ポープ））を指す言葉でもあり、ポープは実際ローマ教会の信徒であった。とは言うものの啓蒙期の詩人として彼は、『人間論』の第三書簡で「本能では神が、理性では人が導く」（第98句）と考え、「完全な本能（full instinct）が迷わぬ案内人である所に、さらに何で法王（Pope）や宗教会議（Council）など必要と言うのか？」（第83句以下）と豪語している。もはやルターの宗教改革（1517年）以降、ローマ法王の至上権は揺らいでいると言える。但し、旧教徒ポープは、せいぜいその程度しか抗議の声をあげず、この点では新教カルヴァン派のハラーの方が遙かに苛酷な旧教批判を繰り広げる。これは恐らく『人間論』の基調が、その冒頭にある「構想」の物語るように、「一見対立する極論同士の中間」を目指す穏当（temperate）な中庸にあるからでもあろう。

しかしながら「構想」の文言通り『人間論』が終始穏当な中庸を保っているわけではない。それは詩人の意図に反して崩れる。だが正に所信表面を裏切る所で、詩人の筆力は常にない緊張を孕み、ここが読み応えある箇所となる。その好例が実は、理神論者が宗教の敵とみなし弾劾する迷信（Superstition）の歌われた『人間論』の第三書簡（第249句以下）である。

迷信は、稲妻の閃光と轟然たる雷鳴の只中、
250　山岳が動揺し、大地が呻く時、
迷信は教えた、弱者には屈伏を、尊大な者には祈りを。
それは自らより強力な不可視の力に平伏すること。
迷信は、大地が裂け、空が爆破する所から、
見た、神々（gods）が降臨し、冥府の魔神ら（fiends infernal）が身を起こすのを。
…

そこで処々の祭壇は大理石（marble）となり、血煙りをあげ、
265　その時初めて祭司（flamen）は、生きものを賞味し、
次いで祭司の残忍な偶像（idol）は、人血（human blood）で汚れた。

明らかに異教圏ギリシア等の神話世界が、偶像崇拝の本場に仕立て上げられ、ここに迷信が君臨し、その残忍な偶像（grim idol）が人道に反する忌まわしいものとされている。このことは言葉の用法から一層明瞭で、第264句にある大理石の祭壇、それに第265句の祭司は古典古代、なかんずく古代ギリシアを彷彿とさせる。当然ポープは、旧教カトリックの司祭（priest）と区別して、祭司（flamen）と第265句に記すことで、自分の属するローマ教会が偶像崇拝と無縁であることを示そうとしている。

ところが新教カルヴァン派のハラーには、ローマ教会カトリックこそ迷信に他ならず、その司祭も古典古代の祭司（Priester）と大同小異なのである。次に引く『理性考』の第147句以下はこのことを物語り、『人間論』から取った先の例文と同様、詩人自身が真正と看做す宗教の宿敵を打倒せんとする意気ごみに溢れ躍動する詩節である。

悪徳さえもが、神々の属性として許容され、
そして人々は、神々の不面目を世の例とすることが出来た。
貪欲、虚言、豪奢、そして非難されることが、
150　黄金で飾られて祭壇に坐り、そして聖なる香を享けたのだ。
今や世は神殿や林苑に満ち、
更に神々も集った。そして貴金属に飾られ、
やがて祭司（Priester）は俗衆の視線を捕え、
そして望んだ。自らの神のごとく、俗衆に崇敬されんことを。
155　その後に君臨したのは、虚言、華美、見かけ、偽りの印であり、
こうして現世から、内気な自由は敗退せざるを得なくなり、
真理は深い闇に被われ、
理性は下女となり、知恵は躓きとなった。
かくして前世は、考えられるに値する力を奪われ、

160　そして万事は、迷信の頸木（Joch vom Aberglauben）へと屈したのだ。

第153句の祭司（Priester）は、古代神話圏より旧教に至るまで連綿と変わらず、いつも迷信（Aberglaube）の張本人であったと考えられており、新教プロテスタントの牧師（Pastor）と画然と区別される。そしてポープ同様ハラーも第180句で「偶像」（Götzen）に触れ、「偶像の飲み物は温かき人血（Menschen-Blut）である」（第185句）と、『人間論』の主張に賛同する。

但し、血腥い偶像崇拝は『理性考』の場合、何より新大陸征服と宗教裁判における旧教諸国の狂信に結びつく（第209句以下）。

後世は、祖先の狂信（Wuth）に感染し、
210　信仰を剣で植え、流血の肥料をやる。
旧世界は、信仰が別というだけのために、
新世界を荒らしたのではないか？　…

旧教徒ポープが黙して語らぬことを、新教徒ハラーは表立てて取り上げ、迷信に関する詩節を内容豊かにする。確かに、ヴォルテールが『哲学辞典』で述べるように、「一言で云えば、迷信が少ないだけ狂信（fanatisme）も少なく、狂信が少ないだけ不幸も少ない」と、ハラーも『理性考』で主張しているようである。この点では正反対の性格の二人が共同戦線を張り、「最も迷信深い時代が、常に最も恐ろしい罪（horribles crimes）の時代であった」ことを指摘しているのが興味深い。勿論ヴォルテール自身は旧教徒であるから、ハラーほど徹底した反カトリック教会の立場を取らず、「我らの聖なる宗教、これは恐らく唯一の良き宗教であろう」という前提の上で、「信仰心を死刑執行人たちにより維持したりせず、大地を血で浸さないような宗教」を求めている。[21] ところが『理性考』の詩人には、狂信のみならず迷信も打倒されるべき目標なので、「この（旧教の）信仰を選ぶ者は、理性（Vernunft）を捨てることを誓い、思考（Denken）を拒絶し、自ら（人間）に固有の富（Eigenthum）を失った」（第119句以下）ことになってしまうのである。

註

Hallerの引用は、Versuch Schweizerisher Gedichte. 9.Aufl. Göttingen (Vandenhoek) 1762からで、この第10版以降は、12.Aufl. Bern (Typographische Gesellschaft) 1828に拠り、PopeはMacmillan's English Classicsより、An Essay on Man. London 1895／1919とEssay on Criticism. London 1896／1912を底本とした。

1) Pope an W.Walsh 1706 : Yano „Pope" Tokyo (Kenkyusha) 1969. S. 243.

People seek for what they call wit, on all subjects, and in all places ; not considering that nature loves truth so well, that it hardly ever admits of flourishing. ...

2) Kant „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels" Ⅲ. Teil. Anhang : Akademie-Textausgabe. Berlin (Gruyter) 1968. Bd. 1. S. 359／S. 365

このような哲学者の立場でVoltaireもPoème sur la Loi naturelle 1756. Exordeの第15句以下で「自身を知ること」を教えるPopeを称えている。比較されているのは「ホラーティウスとともにボワロー」(第11句) であり、「この者たちが軽く触れた内容をPopeが深めた」(第15句) と指摘される。だが普段Voltaireには後述の軽妙洒落な面が強く、真摯に思索を重ねるHaller達と異なり、結局パスカルの『省察』(註９) に現れた実存の不安を皮肉り、厳密な思想家プラトーンを難解ゆえ敬遠するなど (註８)、この『自然法についての詩篇』に見られる厳粛な面は、Voltaireの場合むしろ稀と言える。Mélanges. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1961. S.273

3) Thomas Aquinas : Summa theologica 1265－1274. Lateinisch／Deutsch. Bd.1. Graz／Wien／Köln (Styria) 1934 (3.Aufl.) S.85 (Deus est ipsum esse ...)

4) Biblia Germanica 1545 nach Luther. I. 1 : 1.Mose 1.1.

5) Dionysius „De coelesti hierarchia" Caput 6. §2 : Patrologia Graeca. Paris (Migne) 1857－1866. Bd.3. Sp.199－202.

6) Voltaire „Lettres philosophiques" (1734ff.) 22 : Mélanges. S.94f.

7) Hazard, Paul : La pensée européenne au XVIIIe siècle. De Montesquieu à Lessing. Paris (Fayard) 1963. S.389 über „An Essay on Man".

8) „Lettres philosophiques" 22 : Mélanges. S.1395 über Pope und Platon.

Platon parlait en poète dans sa prose peu intelligible ; et Pope parle en philosophe dans ses admirables vers. ...

9) Pascal „Pensées" 206／233 : Œuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1954. S.1113／S.1212ff.

Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie. (206) ...

10) „Lettres philosophiques" 25 : Mélanges. S.108f. über Pascal.

... j'ai intérêt, sans doute, qu'il y ait un Dieu ; ...

11) Voltaire „Épître 104 à l'auteur du livre des Troi Imposteurs" (1769) V.22 : Œuvres complètes. Paris (Hachette) 1866－1877. Bd.9. 1866. S.307.

Si Dieu n'existait pas, il faudrait l'inventer.

12) Léonard, Émile-G.: Histoire du Protestantisme. QUE-SAIS-JE? Paris (Presses Universitaires de France) 1950. S.90.

Haller qui, d'après Philippe Godet, « inspirait à Voltaire une sorte frayeur respectueuse» ,...

13) Hegel „Philosophie der Geschichte" (1837) Einleitung : Werke 1832－1845. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1969－1971. Bd.12. S.53.

Denn die Vernunft ist das Vernehmen des göttlichen Werkes.

14) Wolff „Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt" (1719／1721／1725／1729／1751) §.610／§.1008／／ „Vernünfftige Gedancken von der Menschen Thun und Lassen, zu Beförderung ihrer Glückseeligkeit"(1720／1722／1728／1733) §.164／ §.189 : Gesammelte Werke. Hildesheim (Olms) I.Abt. Bd.2. 1983. S.378／S.622／／I.Abt. Bd.4. 1976. S.98／S.116.

15) 理神論者 (Déiste) をVoltaire自身は有神論者 (Théiste) と、Dictionnaire philosophique 1764. Paris (Garnier-Flammarion) 1964. S.361で呼んでいる。

16) Holbach, Paul-Henry : Système de la Nature 1770. Nouvelle édition, avec des notes et des corrections, par Diderot. Paris 1821. Bd.2. S.343.

... l'athéisme bien entendu est fondé sur la nature et la raison, ...

教会を敵視しつつも既成宗教の説く勧善懲悪を重んじるVoltaireが、この『自然の体系』の説く無神論を斥けたことは、1770年11月1日付書簡 (Œuvres complètes 1866－1877. Bd.43. S.176f.) に良く現われており、彼は「報い罰する神 (Dieu rémunérateur et vengeur) が存在するという主張を支持するのが常に大変良いことであると、私は思います」と述べ、更に前述の書簡詩の第22句 (註11) をも引用して自説を正当化しようとしている。

17) Hölderlin an die Mutter vom 14.2.1791 : Stuttgarter Ausgabe 1946－1977. Bd.6. S.64 über Spinoza als „großen edeln Mann" und „Gottesläugner".

＊Voltaire „Dictionnaire philosophique" S.56 über „Athée".

Spinoza était non seulement athée, mais il enseigna l'athéisme : ...

18) Heine „De l'Allemagne" Ⅲ (De Kant jusqu' à Hegel) : Säkularausgabe. Berlin (Akademie)／Paris (CNRS) Bd.16. 1978. S.75f.／S.79. über Kant.

... Kant, ce grand démolisseur dans le domaine de la pensée, ...

19) „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels" Ⅱ.Teil. 7. Hauptstück : Akademie-Textausgabe. Bd.1. S.314 über Haller.

...der erhabenste unter den deutschen Dichtern ...

20) „Lettres philosophiques" 22 : Mélanges. S.1394 über Pope.

... le plus beau poème didactique, le plus utile, le plus sublime ...

21) „Dictionnaire philosophique" S.333f. (Religion)／S.357ff. (Superstition).

ZUSAMMENFASSUNG

Wie Haller selber in der Fußnote über den V.17 der „Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben"(1732) kommentiert, hat dieses Gedicht mit Popes lehrdichterischem „Versuch über den Menschen" (1833f.) mehrere Gedanken gemein. Die Dichter halten beide z.B. das mythische Griechentum für ein Produkt des Aberglaubens. Der Aberglaube aber wird von dem kalvinischen Schweizer noch eingehender untersucht, als von dem katholischen Engländer, der fast keine Kritik über seine Kirche schreibt, während sie für den Protestanten nichts als ein „Joch vom Aberglauben" ist. Im aufklärerischen Kampfplatz bilden interessanterweise der ernste Reformator und der giftige Voltaire eine gemeinsame Front, um die positive Religion der freien und öffentlichen Prüfung der Vernunft preiszugeben.

Mit Popes beredsamer Spruchdichtung der moralisierenden Episteln kontrastiert das „eigene Lallen" der tiefgreifenden Vernunft von Haller, der „Voltaire in eine Art vom achtungsvollen Schrecken versetzte" . Seine „Gedanken über Vernunft ..." mit so forschenden Fragen gelten manchmal eher für eine Gedankenlyrik als für eine Lehrdichtung. Daher ist es nicht übertrieben, wenn der Philosoph Kant ihn den „erhabensten unter den deutschen Dichtern" in der „Allgemeinen Naturgeschichte und Theorie des Himmels" (1755) nennt. Obwohl die Aufklärungszeit voll mit Voltaires Witzen und Popes Maximen war, konnte die wirkliche Vernunft, um mit Haller zu sprechen, „wie der Mond, ein Trost der dunkeln Zeiten, uns durch die braune Nacht mit halbem Schimmer leiten."

SUMMARY

There are some ideas common to Haller's *Thoughts on Reason, Superstition and Irreligion* (1732) and Pope's *Essay on Man* (1833f.), as the erudite Continental himself makes notes on the line 17 of his poem. As concerns mythical Greece, they concur in condemning the domination of superstition. But the Calvinistical Swisser relates it further to the Christianity before the Reformation, while the British Catholic hardly speaks ill of the Church. It arouses our interest to find an enlightening front of the serious reformist and cynic Voltaire who speaks daggers to the Catholic Church in his *Letters concerning the English Nation* (1733), *Philosophical Dictionary* (1764) etc.

Haller's "Lallen"(stammer) of the profound "Vernunft"(reason) stands in distinct contrast to the moralizing eloquence of Pope's epistles. His *Thoughts on Reason*, with their enquiring questions, are understood sometimes rather to be a "Gedankenlyrik"(Thought-lyric) than to be a didactical poem. Hence come no exaggerated superlatives when Kant considers him as "the most sublime among the German poets" in *General Natural-History and Theory of the Heaven* (1755). In spite of Voltaire's wits and Pope's maxims, that is to say in the words of Haller, the "Vernunft" could, "as the moon, be a consolation of the dark ages and lead with half gleam through the brown night."

（受理　1993年4月20日）